慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	理論経済学の対象
Sub Title	
Author	奥田, 忠雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.3 (1931. 3) ,p.365(61)- 417(113)
JaLC DOI	10.14991/001.19310301-0061
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310301-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理論經濟學の對象

奥田忠雄

一

吾々が理論經濟學を研究するに當つて、最初にぶつかる問題は、一體理論經濟學とは何を研究する學問なのか、其の對象は何であるのかとの問題である。だが理論經濟學が學問として成立して以來既に數世紀を經た今日に於てさへ、尙ほ何等の定說を見出し得ないのである。從つて、從來諸學派の定立した對象を批判し乍ら、其處に自分が正しいと思ふ對象を規定するより外に途はない。先づ最初に次の如き規定を立て得ると思ふ。

一、理論經濟學は社會關係を其の對象とする。

今日何人と雖も、理論經濟學を以つて自然科學なりと考へるものはないであらう。即ち純自然現象乃至人間が一定の目的に自然を利用せんとして起る人間對自然の技術的現象を取扱ふものだとは考へないであらう。夫は自然そのもの及び自然對人間の關係ではなく、人間對人間の關係、即ち社會關係を取扱ふ社會科學の一部門に屬することは疑ひないであらう。

だが對象に就いての此の最初の規定に於て、吾々は既に限界效用學派と絶緣しなければならなく

なる。限界效用學派は今日尙ほ一般的承認を保持して居るとは云へ、又其の學派に屬する學者自身は理論經濟學を社會科學なりと信じて居るとは云へ、彼等は其の對象を人間對物の關係に還元することに依つて、理論經濟學を技術或は自然科學に化さしめて居る。

ディールが簡明に要約する所に從へば、限界效用學派の根本思想は次の如くである。『人間の幸福は一定の財貨の處分に掛つて居る。是等財貨の大部分は專ら限られた量に於て人間の處分に任されて居るからして、是等の財貨の量と人間の欲望との間には或る依存關係が生じて來る。人間の欲望と限られて存する財貨の量との間の關係法則を確立することが理論經濟學の任務である』と。（K. Diehl, Theoretische Nationalökonomie, Bd. I S. 269）然らば、ディールが指摘して居るが如く、何故彼等は自らを社會科學者と信じつゝも、尙ほ理論經濟學の對象を人間對人間の關係ではなく、人間對物の關係に還元したのであらうか。夫は彼等が個人現象と社會現象との間に本質的相違を認めずして、社會現象を個人現象に還元して終つた結果、眞く社會關係が研究對象から抽出されて終つて居るからである。限界效用學派の代表者ボェム・バウエルクは明かに次の如く云つて居る。『經濟學の課題は社會法則の研究であるが、其の社會法則は個人の一致せる行爲に基いて居る。更に行爲に於ける一致は、其の行爲を導く所の一致せる動機の作用する結果である。斯る事情にあつては、社會法則の說明は個人の行爲を導く所の原動力たる動機に迄溯り、即ち夫等の動機から出發しなければならぬことは眞く疑があり得ないし、又同樣にかの原動力たる動機と、夫等が個人の行爲と如何なる關係にあるかを吾々がより完全に、より深く知れば知るほど、法則の支配に對する洞察は完全なものである筈だ』。（Böhm-Bawerk, Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwertes. Jahrb. f. Nat. u. Stat., Neue Folge, Bd. XIII, 1886, S 78）

斯くの如く、彼は社會を個人に、個人の行爲を其の主觀的動機に還元し、更に主觀的動機を財貨との依存關係に、即ち主觀が財貨から受ける欲望充足の程度、效用に、特に其の同一財貨の最後の增加量より受ける限界效用に還元したのである。從つて、彼にあつては理論經濟學の對象は、財貨との依存關係にある所の自然的衝動に基く欲望充足と云ふ純主觀的な個人の心理過程であり、夫は自然現象に外ならないのである。斯る對象上の錯誤はメンガー（Karl Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 1871）に於ても、ウィザー（Friedrich von Wieser, Grundriss der Sozialökonomik. 1914）に於ても、否な他の總ての限界效用學派に屬する學者に於ても、容易に見出すことを得るのである。

然し個人と社會との間に本質的相違を認めずして、社會現象の研究を個人の心理的自然現象の夫と掏摸替へることは絕對に不可能である。社會は決して個々の個人の算術的合計ではない。反對に各個人の經濟的活動は一定の社會的環境――そこに於て個々の經濟の社會的關係が表現される所の社會的環境――を前提として居る。夫々孤立して生活を營む個人の動機は、『社會的動物』（zoon politikon）の夫とは全然異つて居る。前者は、只環境として、自然、即ち原始的無垢の事物を持つのみであるが、後者は、『財貨』のみならず、特殊な社會的環境を持つて居る。孤立的個人より社會への過程は、只社會的環境を通してのみ可能である。そして若し實際、其の間に何等の接觸點もない、

個々の經濟の合計をのみ問題としたならば、ロオドベルッス(Rodbertus)が適切に『經濟的共同生活體』(wirtschaftliche Gemeinschaft)と名付けた所の、特殊な環境が缺けて居つたとしたならば、其處には如何なる社會も、存在しないであらう。勿論、論理上では、孤立し、隔離せる個々の個人の合計を、統一的概念に包括し、それを一つの全體に、云はゞ押込むことは可能ではある。だが、斯る全體は、社會――相互に密接に結合せられ、不斷の交互作用の内にある個人相互關係の體系である所の社會――とは異なるものである。前の場合の關係が、吾々自身の、人爲的に作り上げたものであるに反し、後の場合の關係は、現實に與へられて居るものである。從つて個々の個人は、只一つの社會的經濟體系の一成員としてのみ、考察され得るのであり、正に財貨對個人の關係ではなく、財貨を介して現はれる人間對人間の社會關係、社會組織が問題である。

此の點に於て、社會派と稱せらるゝ經濟學者の一團は、遙かに正確に理論經濟學の對象を規定して居る。社會的有機的倫理學派(die sozialorganisch-ethische Schule)の代表者シュトルッマンは既に限界效用學派の誤謬をば、彼等が社會現象の研究に當つて、正に此の社會現象を抽象したことにあるとなし、明確に次の如く指摘して居る。『吾々は、經濟の諸形態を孤立化と抽象に依つて、出來るだけ單純に構成し得るも、然し夫等は社會的であらねばならぬのであつて、夫等は社會經濟を對象としなければならぬ』と。(Rudolf Stolzmann, Der Zweck in der Volkswirtschaft. 1909. S. 63)

更に社會的法的經濟學派(die sozialrechtliche Richtung)の代表者ディールは詳細に理論經濟學の對象を規定して居る。『若しも吾々が自己の學問の領域を正しく限定しやうとするならば、内容的標識、即ち欲望充足に向けられた人間生活だけでは充分でない。更に重要な形式的標識が附加へられる。既に吾々が知つた如く、經濟學が欲望充足に向けられた人間の行爲を研究す可きである以上、この事を恰も吾々は個人の欲望、從つて彼の衣食欲其他に出發しなければならぬと云ふが如き意味合の人事だと解釋するのは全く誤つて居るであらう。『人間は各種の欲望を持つ』と多くの經濟學教科書の冒頭に書いてはあるが、夫に依つて吾々の學問の出發點が決して示されはしないであらう。純生理的欲望並に本能を持つた個人は經濟學者に興味を與へない、即ち肉體的欲望を持つた個々の個人は自然科學上並に醫學上の研究對象ではあるが、決して經濟學の對象ではない。吾々の學問に取つては、共同生活を營む個人のみが問題なのである、即ち人間が結合して共同生活を構成し、多數の人間が、群、氏族、種族等から、終には吾々の近代的國家と云ふ最高の組織に迄、組織されて居る場合に初めて、彼等は經濟學上の研究對象をなすのである。吾々は實際此のことを次の如く云ひ表はし得る、即ち個人としてゞはなく、社會現象としての人間のみが吾々に取つて問題なのであると。經濟學の代りに社會經濟學と云ふ名が此のことを云ひ表すものであり、事實既に屢〻吾々の學問に對する名稱として用ひられた。實際此の名稱は正確に吾々が個人經濟ではなく、社會經濟のみを研究せんとすることを示して居る。從つてロビンソン經濟を吾々の眼前に獲へ來つて、夫に據つて財貨、勞働、財産と云ふが如き經濟學上の概念を説明せんとするが如き方法位ひ間違つたものはない。ロビンソンは正に唯一人自己の爲に經濟を營むが故に、經濟學的に考察するならば、何等興味なきものである。ロビンソンは如何にして彼の食物並に溫を取らんとする欲望其他を充すかは、自然

科學者や生理學者に興味を與へ得るも、經濟學者、即ちより正しく云へば、社會經濟學者に取つては全然問題とはされぬ、と云ふのは、吾々に取つては組織された共同生活内で經濟行爲を營む人間のみが問題であり得るからである』と。（K. Diehl, Theoretische Nationalökonomie. Bd. I. S. 3-4）

ディールに近き立場を取るアモン（Alfred Amonn）も、其の著『理論經濟學の對象と根本概念』（Objekt und Grundbegriffe der theoretische Nationalökonomie 2. Aufl. 1927）の至る箇所に於て、繰返し次のことを强調して居る。理論經濟學は人間の物に對する關係を想定する限りに於ての、經濟行爲を研究するのではなく、寧ろ一定形態の社會關係を研究するのであると。アモンの第一の命題は、價格問題を中心とする所の理論經濟學の全問題は人間相互の一定の社會關係、更に詳しく云へば、特に交換關係を想定すると云ふことである。第二の命題は、人間の社會關係の一定の形態は夫々一定の社會構造、更に詳しく云へば、或る『社會組織』を前提とすると云ふことである。（vgl. Ebenda, S. 194）（アモンの理論經濟學の對象に對するマルキストの批評としては、次の如きものがある。I. I. Rubin, Alfred Amonn und das Objekt der theoretischen Nationalökonomie. Unter dem Banner des Marxismus. Jahrgang III Heft NR. I. S. 128 ff.）

だが理論經濟學の對象の斯る規定は、社會派に先立つて、既に半世紀以前マルクスに依つて、『經濟學批判序說』中に指摘されて居る。『生產は常に、特殊な生產業であり、又は一個の總體――例へば農業、牧畜業、工場手工業（マニュファクチュアー）等の如き――である。然し乍ら經濟學は工藝學（テヒノロジー）では無い。』（K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. 1857. S. XVI. herausgegeben von K. Kautsky）と。

即ち『生產』は現實の事實としては、『常に特殊な生產業』として表はれて來るものである。生產業は、例へば工業に就いて見れば、個々の個人の手工業として、或は之が資本化されて工場手工業として、更に機械の應用に依つて工場工業として表はれる。更に工場工業は紡績業、織物業、化學工業、機械工業と云ふが如き個々獨立の經營として表はれるものであり、更に之等の獨立の經營は國內的及び國際的市場を通じて結合され、一個の總體としての工業となる。他の生產業も同じである。だが、此處で『特殊』と云ひ『總體』と云ふも、夫は孰れも技術的の特殊であり、總體であり、經營上より見たものである。如何なる原料を用ひるか、原料は、幾段に加工されるか。如何なる機械を使用するか。勞働の效果、生產物の品質分量は如何と云ふが如き、又例へば、一の經濟主體が最少勞費を以つて最大效果を擧げんには、經營を如何にすれば良いか等の問題に屬するもので、所謂經營學上の見地である。

之に反して理論經濟學の對象は、人と人との關係に關する問題である。夫は物を通して生ずることを特徵とするとは云へ、夫自身社會的問題である。即ち、夫は原料や勞働の性質又は生產物の品質分量竝に加工の方法、經營の技術等に關するものでなく、一定の社會的秩序の下に於て、社會的行程としての社會的生產が如何にして行はれ、又かくて生產された財貨が、社會の各員の間に如何に分配されるかと云ふ問題である。夫故、例へば土地所有の關係は、一個の經濟問題である。例へば、地主對小作人の關係、地代、小作料の如き問題は經濟問題である。然しこの土地經營に用ひられる農具、肥料及び經營の大小と云ふやうなことは、經濟學上の問題ではなく、農藝學の問題である。

夫故にエンゲルスも、『經濟學は物を取扱ふのではなく、人と人との關係、結局に於て階級間の關係を取扱ふ。この關係は物と結合して居り、且つ物として現はれる』と。レーニンも同じ意味のことを書いて居る。『その對象（理論經濟學の對象）は屢〻言はれる如く、「物質的價値の生産」ではなくて（これは工藝學の對象である）、生産に於る人間の諸關係である』と。

斯くて、吾々は理論經濟學の對象の第一の規定として、夫は一定の社會組織を前提とする一定の社會關係、即ち人間對人間の關係であると云ふ結論に達した。だが斯く云つたからとて、純自然現象及び自然を人間が一定の目的に利用する過程、即ち技術現象を全然無視することを意味しはしない。と云ふのは、後に述べる如く、經濟關係と云ふ社會關係は生産關係に包攝されるものであつて、此の生産關係（人間對人間の關係）は人間の自然に對する關係と不可分の統一をなして居るからである。人間の現實的な生活、即ち『人間生活の社會的生産』は最初から二重性を持つた一個の關係として現はれ、一方は人間の自然に對する關係であり、他方は人間相互の關係である。前者は人間と自然との間に於る物質交換又は物材代謝の關係であり、後者は人間相互の間に於る勞働交換の關係である。かくて前の關係に於て人間の『生産力』が現はれ、後の關係に於て彼等の『生産關係』が現はれるのである。夫故理論經濟學は本來社會關係たる生産關係を取扱ふのではあるが、之と不可分な統一關係にある自然的技術的要素を常に必要な範圍に於て研究の内に取入れなければならぬ。然し限界效用學派の如く、對象の主客を顚倒することは絶對に不可である。何故ならば、シュトルツマンが非常に正當に指摘して居る如く、『自然的範疇は、單に經濟現象の完成の爲の技術的可能性を與ふるに過ぎないからである。（Stolzmann, Zweck in der Volkswirtschaft. S. 131）

二

吾々は更に對象の第二の規定に移る。

二、理論經濟學は經濟關係を其の對象とする。

此の第二の規定は經濟學は經濟を研究するのだと云ふやうな、單に同意語反復的に聞へるかも知れない。然し此處で斯る規定を擧げたのは特別の意味が附與されて居るのである。即ち理論經濟學は凡ゆる他の社會關係――法律關係、政治關係、倫理的（道德的）關係等――から獨立して經濟關係（經濟關係の意味は次の節で說明する）のみを其の對象として研究し得るか、夫とも他の社會關係を前提としてのみ研究し得るかの問題を取扱ふのである。

筆者は此の點に於て第一の立場を取るのである。と云ふのは、經濟關係は他の社會關係を前提とせず、逆に他の社會關係が經濟關係を前提とするからである。だが勿論現實の社會關係に於ては、經濟關係と他の社會關係とが夫々別々に存するのではなく、不可分の統一として現はれるが、唯〻經濟關係は全社會關係の獨立變數項を表はし、他の社會關係は從屬變數項を表はすものであつて、夫故にこそ理論經濟學は經濟關係を他の社會關係より獨立に對象として研究し得ると云ふのである。

斯る意味の對象の第二の規定に於て、吾々は先づ最初の規定の範圍では共同の步調を取つた社會的法的經濟學派と分離しなければならなくなる。ディールはシュタムラーの社會哲學に基いて、社會的經濟現象の認識條件として法律形式を認め、從つて理論經濟學の對象の不可分の要素として法

律關係を引き入れて居る。（拙稿、三田學會雜誌、第二十三卷、第一號所載、「ルドルフ・シュタムラーの經濟學の方法論」參照）ディールは先に引用した理論經濟學の對象の規定に關する箇所に於て次の如く云つて居る。『斯る結合を造り出し、又人間の自然的、竝存的生活から社會的協力を實際成立せしめる所の。共同生活の構成力は何であるか。斯る共同生活を構成する力は法律秩序であつて、夫は人間を結合し、外的强制に依つて共同生活の確固たる規制と規範を與へ、斯くして初めて規制せられ、秩序附けられた共同生活を可能にし、從つて經濟的文化を可能ならしめる。經濟現象は人間の經濟行爲が何等かの方法に於て秩序附けられて居り、且つ斯くして人間の自然的衝動生活が理性的な社會生活に高められる場合に初めて存するのである。余のものと汝のものに對して、又團體內の人間の双方的權利義務に關して確固たる規範が與へられて居る場合に初めて、經濟關係は學問上の研究對象たり得るものとして通覽される譯である。我々は此の場合勿論、更に近時の高度に發達した法律關係を考へるを要さない、既に慣習法の最も幼稚な形式が此の秩序を設定し、人間相互の經濟的取引に對する確固たる原則を造り出すに充分である、而して斯る形式にしてなかつたならば、如何なる社會的共同生活も不可能である。然る限りに於て、正當にシュタムラーに依つて外的に規制された秩序なき社會生活の存せざることが主張されて居る』と。（Ebenda. S. 5）

右の引用句にて明かなる如く、ディールは法律關係を以つて實際上全社會關係、從つて經濟關係の構成力と見、當然法律關係を理論經濟學の對象中に引入る可きことを主張して居る。此の點に於てディールは全くシュタムラーの社會哲學を誤用して居るのである。本來シュタムラーはカントの先驗的認識論に從つて、法律が經濟に對して先驗的に（論理的に）先在し、形式として經濟を規定すると云ふに留まつて居るが、ディールにあつては恰も現實の經驗に於て法律が先にあつて、初めて經濟關係を構成するが如く述べて居る。（カントの先驗的觀念論其ものも、理論經濟學の方法の基礎となし得ないことは、方法論の章に行つてから述べるつもりである。）

だが現實の歷史的過程に於ては、之と全く反對のことが眞實である。なるほど法律の發達は經濟の發達と平行して行はれる。然し經濟の條件を造り出すのは法律ではなく、經濟が其の必要に應じて、その發展に必要なる所の法律秩序を造り出すのである。法律は事實經濟の發達を妨げ得るも、然し繼續的に夫に對して法規を規定し得ない。カルネルは、其の著『法律制度の社會的機能』（J. Karner, Die soziale Funktion der Rechtsinstitute. Marxstudien Bd. I. 1904. カルネルの本名はカール・レンナーであつて、當時彼はオーストリーの官吏の地位にあつた關係上、右の如き匿名を用ひたのである。此の本は久しく絕版となつて居つて、容易に手に入り難いものであつたが、最近多少手を加へて再び出版された。Karl Renner, Die Rechtsinstitute des Privatrechts. 1929）に於て法律と經濟の相互關係の問題を詳細に分析して居る。彼は其の研究を所有權の機能の變化に限り、以つて經濟が法律を規定するか、夫とも法律が經濟を規定するかの具體的問題を解決せんとした。（拙稿、三田學會雜誌第二十四卷、第五號、「勞働法の研究方法」六四頁以下參照）

カルネルは『法律制度――就中所有權――をその二面から、即ちその法律的、及び經濟的性質から』研究した。斯くて彼は所有權の規範的構成をその社會的機能から區別した。（Ebenda. S. 66）

『總て法律は意志關係であり、就中個人意志の總體意志への服從である。』(Ebenda. S. 68)『吾々が一定の秩序を靜止せるものとして、或る時期に、固定して觀察する場合にのみ、吾々は法律制度と經濟過程の或る相互依存に就いて語り得る。兩者はその統一内にあつて、正に一つの經濟組織を構成する。』(Ebenda. S. 74)

他方法律と經濟が發展の流に於て觀察される場合には、兩者の關係は全く異つて現はれる。

『法律制度は規範の總體である。此のもの(規範)は經濟關係の變化に際して、變化せずに留まるがそのもの、機能は變化され、擴大され、限少されて來るし、或は行はれなくなるからして、其の場合機能の變化が存する。』(Ebenda. S. 81)

『單純商品生產に於ては、その法律形式(規範)は經濟組織を適當に現はして居る。

『手工業的生產の全盛時代に於ては、一般に都市は一家族よりなる家から成つて居つた。家を謳歌する詩歌の總ては、この時代を歌つたものであり、又シルレルの『鐘の歌』は、家の不朽の讃美歌である。『家』は家族を表はし、職業(商店、營業所)を表はし、財產を表はした。夫は單に建物を表はして居るばかりでなく、全體の一部として營業及び人をも表はして居つた。この時代に於ては、『所有權』は單なる論理的法律形式(註、規範)ではなく、寧ろ或る一人の所屬物であり、かのエルブ・ウント・アイゲン(Erb und Eigen)は、夫に所屬する凡ゆる物を包括した家屋敷であり、今日の法律學者に依れば、所有權客體の總體となされる所の、全然特定の物の總計であつた。

或る個人に屬する斯る『アイゲン』は、主人とその家族に生產の場所、即ち作業場と原料貯藏所とを、紡ぎ部屋と裁縫部屋とを、家内庭園その他の耕作地とを、通例は都市森林の區分地を提供した。それは又商品交換の場所、即ち街路店舗を提供した――そして、手工業は註文生產であるから、賣買なる一回の行爲に於て、價値と余剩價値との實現、總ての分配が行はれたのである。更に又、斯るアイゲンは、同時に消費の場所と設備、即ち住宅、世帶、貯藏室及び穴藏であつた。』

『農民のホーフ・アウフ・デム・ランド(Hof auf dem Land、手工業時代の農民の不動產に對する相續せらるゝ所有權)に付ても同樣である。家とホーフとは、此の場合法律制度が意識的に或は無意識的に夫と調和した所の、形態として妥當する。夫々の地方に對して、此の調和の時期を夫々歷史上確定し得る。』

吾々は之と現在とを比較してみやう。『何よりも先づ基本的事實に付て觀るならば、所有權の法律(註、規範としての法律)は、その同一を持續して來た――而も全くさうなのである。即ち、佛蘭西の民法典、普魯西の州法、墺太利民法典等の規範は、今日に於ても尙ほ效力を持つて居り、新獨逸民法典中の所有權は、以上の諸法典に於けるよりも寧ろ一層嚴格に云ひ表はされて居る。要するに、何等の規範の變遷も存さないのである。』

『然し事實上は、吾々がよく考察する時は十分に驚かすに足る程の、著しい變化が行はれた。即ち、一家族よりなる家も、斯る家を織込んだ全小宇宙も、文字通りに粉碎されたのである。

吾々は最早家を持たない。吾々は單に住居を持つて居るだけである――我が家の概念は、一定の番地と戸口の番號とに輕減した。吾々は幸ひにも居住者として收奪されたのである。

何が一家族よりなる家に入れ代つたか？　その第一の部分である所の作業場は、もぎ取られて、漂流する木片となつた――最も都合好く行つても、住居が階上に在るならば地下室にあるに過ぎない。通常の場合には、作業場の數々は、工場に集中されたのである。原料貯藏所や紡ぎ部屋や裁縫部屋に就ても亦同じである。家の小庭園は、都市の郊外の蔬菜園に集中せられ、『家の田畑』、家の森林も亦同じ運命に遭遇した――街頭の店舗はもぎ取られるか、又は商品倉庫に集積されるかの孰れかとなり、居室は賃貸家屋に、糧食貯藏室は倉料品店に、穴藏と既に一部の竈とは料理店に集中された。要するに、小宇宙はその諸〻の原子に分解され、夫等は新たに集團化されたのである。

單にこれだけではない。育兒室は幼稚園、育兒院、學校、寄宿學校等の公の施設に集中され、養老部屋は養老院に、病床は療養所に集中され、職人と徒弟とは家族團體の外に於て生活するに至つた。姑すら無慈悲にも家の外に逐ひ出された。

夫故所有權の客體の變革が行はれたことは明かである。物的小宇宙は分解された。

然し斯る物的推移は、事實上の主體の變更なしには不可能であつた。單純なる商品生産の『アイゲン』、『エルブ・ウント・アイゲン』は、其の物的分解と同時に、所有主の人格からも一つ一つ分離せざるを得なかつた。この主體の推移は、所有主の方面から見れば法律的讓渡であり、取得者の方面から見れば領得である。夫は法規に依つて强制されたものではなく、寧ろ事實上の收奪と領有である。かやうな所有權及び其他の類似の法律制度に於ける事實上の、法律上ではない所の、主體の推移の意味に於てのみ、マルクスは收奪なる言葉を用ひて居り、又斯る意味に於てのみ、彼は理解されんことを欲して居る。

如何なる自然的―社會的法則（決して法律規範ではない！）が斯る進化を成し遂げたか、は既にカール・マルクスの詳細に亘つて證明した所である。彼も亦――吾々が彼の例に從つた如く――單純なる商品生産から出發して、先づ最初に、單純なる商品生産に於ては、總ての商品は、その價値に從つて、換言すれば商品に費された平均的社會的必要勞働時間に從つて、交換されねばならぬこと、此の場合更に價格と價値とは通常一致することを證明して居る。更にこの經濟階段にあつては、土地、自然素材、竝に自己及び他人の勞働力は、殆んど同等の關係に於て入り込むが故に、總ての生産條件は區別されることなく、價値及び余剰價値、地代、利潤、約言すれば、總ての經濟的範疇は、勞働と勞働收益とに還元されるのである。勞働のみが價値を形成し、創造するものである、と云ふ事實が特に目立つのも亦この階段に於てである。

マルクスの思想家としての獨特な業蹟は、第一に彼が單純なる商品生産の資本主義的生産方法への必然的推移を指摘し、これを分析した點に始まる。この分析は、同時に優れたる法制史的價値を持つて居る。この分析は、規範の社會的機能の變遷は結局に於て規範を變革せざるを得ないものであり、（註、規範としての）法律は經濟關係に依つて規定されるものである、と云ふ眞理の鍵を彼に與へた。』

カルネルは更に親族法、相續法等の社會的機能の變化を詳細に分析し、次の如き結論に達した。

『既に吾々の知れる如く、財産制度は、その法律的性質（註、規範）は何等の變化を來たさずして、比

較的短期間に充分の發達を遂げ、全くの變革を伴なつた。此の事實は先づ第一に、社會の變革は同時に法律制度の變革なしに行はれ得ることを證明する。確かに、法律は經濟的發展を惹起すものでない、と云ふ命題が證明されると思ふ。上掲の總ての例は、一定の歷史上與へられた法律秩序は此の場合前提であり、條件ではあるが、變化の原因ではないと云ふことを示す。一定の歷史的基礎、即ち單純なる商品生產に適應した所の法律秩序は、その意義を此の基礎に依つて與へられて居り、その基礎を維持し、拘束するやうに定められて居るのだが、此の法律秩序は其の基礎の變化を妨げない。社會生活の實質、即ち種の保存と再生產とは法律形式が同一に留つて居る場合に全く其の性質を變化するのであつて、法律形式は變化の原因ではない。法律制度の社會的機能はその法律上（規範）の變化なくして、變るのである。』

經濟はその內在的法則に基いて發展するに反し、法律は唯、革命的行爲の形に於てのみ、其の社會的機能に適合し得る。法律は經濟を規制する形式であるが故に、常に制動機たるに留るが、決して因果的に云つて發展の決定要素ではないのである。

斯くて、シュタムラーが先驗的觀念論の世界內で揑ち上げた『法律形式は經濟の認識條件である』と云ふ命題も、又之を經濟の事實的過程の說明原理に用ひて、『理論經濟學の對象は法律形式を俟つて初めて成立する』となすディールの命題も、共に現實の過程と相矛盾することが明かとなつた。正に經濟は法律形式（規範）が同一に留つて居る間にも、之と獨立して、自己の內在的法則に從つて變化するが故に、經濟關係を法律形式から獨立させて、研究對象とするを得るのである。之と反對に、若し法律學が死んだ學問ではなく、生きた學問たらんと欲するならば、無機能なる法律形式（規範）の解釋ではなく、常に一定の經濟關係を前提としつゝ、その現實の社會的機能を研究す可きではなからうか。

勿論ディールと雖も、時に經濟關係を規制し得ざる法律規範が事實存することを認めて居る。『住民の心と意思が或る法律規定に全然反抗して居る場合には、其の法規は丁度例へばベルンハルディが報告して居るやうに無力たるに留るであらう』と。（Diehl, Ebenda. S. 44）ディールは最初マルクスと同じく理論經濟學の對象を社會關係と規定しながら、此の點に於て急に觀念論的歷史觀に墜入つて終つて居る。即ち彼は、立法者の無力を經濟的基礎に歸さずに、住民の反抗的精神に歸して終つて居る。

吾々は次に經濟關係を政治關係から獨立して、對象とするを得るかの問題を取扱はう。蓋し理論經濟學の對象中に政治關係をも引入れんとする立場は、一般に權力學說（Machttheorie）なる名稱を以つて呼ばれて居る。勿論種々なる權力學說中には、權力なる概念を政治的權力以外の意味に用ひるものがある。例へば、『社會的專橫』（soziale Willkür）『法律違反』（Rechtsverletzung）『經濟的搾取』（wirtschaftliche Ausbeutung）『優勢』（übermacht）『暴力』（Gewalt）等の意に用ひる者もある。（vgl. Haus Honegger, Der Machtgedanke u. das Produktionsproblem. in Schmollers Jahrbuch. 49 Jahrg. 3 Heft. 1925, S. 19 ff. Arthur Salz, Macht u. Wirtschaftsgesetz. 1930. S. 35 ff.）然し此處では專ら政治的權力學說を問題とする。此の立場を取る有名な者としては、Eugen Dühring,（Cursus der

National- und Sozialökonomie. 1873.)' Franz Oppenheimer (Theorie der reinen und politischen Ökonomie. 1910)等がある。

例へばデューリングは次の如く云つて居る。『經濟的權利の形成に對する一般政治の關係は、余の理論體系に於ては極めて決定的な、同時に又極めて特有な意義を有するものであるから、特に此の點に論及することは、本研究を解りやすくする上に無駄ではあるまい。政治關係の形成は歴史的に基本的なものであつて、經濟的隷屬はたゞ一の作用又は一の特例であり、從つて常に第二次の事實たるに過ぎない。近頃或る二三の社會主義理論は、全く之と正反對の關係の、眼につくがまゝの、外見を指導原理として、經濟狀態から政治的隷屬關係を謂はゞ生ひ立たせる、ところで、なるほど此の第二次の作用そのものは嚴存して居るのみでなく、現在では夫が最も强く感知されはする、けれども起原は之を直接的なる政治的暴力に求むべきであつて、たゞちに間接的なる經濟的權力に求むべきではない』と。之を證明する爲に、彼はロビンソンとフライデーを用ひて居る。ロビンソンがフライデーを奴隷にすることは、一つの暴力行爲であり、從つて一の政治行爲であり、この奴隷化は從來の歴史の出發點であり、根本的事實であつて、僅かに此の奴隷化は後世に至つて緩和され、『より間接なる經濟的隷屬形態に變へ』られたのであるから、大凡經濟現象が政治的原因、即ち暴力から說明さるべきものなること明白であると。

エンゲルスは、かの有名なる『反デューリング論』(Friedrich Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. 12 Aufl. 1923)に於て、此の政治的權力學說の誤謬を明瞭に指摘して居る。

『デューリング氏が從來の一切の歴史を人間に依る人間の奴隷化に歸着せしめることを、いま假りに暫く正しいとしても、之に依つては未だ吾々は事の根柢には觸れて居らぬ。寧ろ先づ起る疑問はどうしてロビンソンはフライデーを奴隷とするに至つたかである。たゞの慰みにか？　決してさうではない。正反對に吾々は、フライデーが『奴隷又は單なる道具として經濟的勞役を强制され、そして又單に道具としてのみ維持される』ことを見る。ロビンソンがフライデーを奴隷としたのは、專らフライデーをロビンソンの利益に働かせるためであつた。然らばどうしてロビンソンはフライデーの勞働から自分の利益を引出し得るか？　曰く、ロビンソンがフライデーに勞働能力を維持させる爲に與へねばならぬよりも、より多くの生活資料をフライデーがその勞働によつて生産するからである。だがロビンソンは、デューリング氏の明白なる命令に反して、フライデーを奴隷にすることに依つて作られた『それ自體のための政治組織を出發點としないで、之を專ら糧食目的の爲の手段として取扱』つたのであつて、こゝに於て彼はその主人たるデューリング氏と、どういふ風に一致するかは今や自ら明かではないか。

だからデューリング氏が暴力を『歴史的に基本的なるもの』として證明する爲に折角獨自に發見した子供らしい例證は、要するに暴力がたゞ手段に止まり、經濟的利益が反つて目的なることを立證する。目的が夫に用ひられる手段よりも、より『基本的なるもの』であるやうに、歴史に於ては經濟、關係の方が政治關係よりも、より基本的なものである。――デューリング氏に生れ變るならいざ知

らず、さもなければ租稅が國家に於て只『第二次の作用』であるとか、支配的のブルヂョアジー及び被支配的プロレタリアートより成る今日の政治組織が『夫自體のために』存在するのであつて、支配的ブルジョアジーの『糧食目的』の爲に、即ち利潤作出と資本蓄積との爲に存在するのではないとか、思ひ込むなどは不可能である。』(Ebenda. S. 164-165)

更に此のことを、ロビンソン的空想の世界から、歷史的現實の世界に移して見ても同じである。

『若し「政治的狀態が經濟狀態の決定原因である」ならば、近世ブルジョアジーは封建制度との鬪爭に於て發展したものではなくて、自由意思で孕まれた封建制度の寵兒でなければならぬ。けれども何人も知る如く、事實はその正反對であつた。その初めには支配的封建貴族に對して貢稅義務を有し、そして凡ゆる種類の奴隸や農奴やの內から、次第にその人員を補充された被壓迫階級たりし、ブルジョア階級は、貴族との不斷の鬪爭に於て、歩一歩と權力地位を攻略し、やがて最も發展せる諸國に於ては、彼等に代つて支配權を掌握したのである。……彼等は如何にしてこれを成し遂げたか？　夫は全く「經濟狀態」の變化によつてゞあつて、此の變化に續いて政治狀態の變化が、早いか遲いか、自由意思でか鬪爭に依つてか、行はれたのである。封建貴族に對するブルヂョアジーの鬪爭は、田園に對する都市の鬪爭であり、土地所有に對する產業の鬪爭であり、自然經濟に對する貨幣經濟の鬪爭であり、そしてこの鬪爭に於けるブルジョアの決定的武器は、初めは手工業的な、後にはマニュアクチュア(工場手工業)に迄進歩した、產業の發展と商業の擴大とによつて絕へず向上せる彼等の經濟的權力手段に外ならなかつた。この全鬪爭の間、政治的暴力は貴族の側にあつた。……政治的地位から云へば、貴族は一切でブルジョアは無であつたが、社會的境遇から云へば、ブルジョアは今や國家に於て最重要なる階級であつて、貴族は既に凡ゆる其の社會的機能を失つて居つたにも拘らず、貴族は所得の形に於て、この既に消滅せる機能に對して依然として報酬を着服しつゝあつた。夫に止まらない、ブルヂョアジーの全生產は――マニュフクチアばかりでなく手工業でさへも――とつくに中世の封建的政治形態より太り過ぎて居つたのに、而も依然として此の政治形態內に押し込まれてゐた、即ち專ら生產の邪魔物や桎梏となり果てた百千のギルド的特權なり地方的及び敎區的の關稅障壁なりの凡らゆるものゝ內に押し込められてゐたのである。ブルヂョアジーの革命は遂に之に終焉を告げしめた。だが然し、斯く終焉せしめるに當り、この革命は決して、デューリング氏の原則に從つて、經濟狀態が政治狀態に適合せしめたのではなく(之は實に貴族や王が多年來無益にも試みたことであつた)、反つて反對に夫は徹の生へた古い政治的がらくたを放棄して新たなる「經濟狀態」の存續し發展し得るやうな政治形態を作り出したのである。』(Ebenda. S. 169-170)

『之に依つて見れば、暴力が經濟發展に對して歷史上如何なる役割を演ずるかは明瞭である。第一に、凡ゆる政治的暴力は初めは一の經濟的、社會的機能を基礎とするものである。……第二に、政治的暴力が社會に對して獨自化し社會の奴僕から其の主人に變つた後に於ては、夫は二樣の方向に作用し得る。一つには、夫は合則的な經濟的發展の意義竝に其の方向に於て作用する。この場合には、兩者の間には何等の爭ひもなく、經濟的發展は促進される。然し今一つには、夫は此の經濟的

發展を阻害する方向に於て作用する、其の場合には、二三の例外を除けば常に夫は經濟的發展の前に斃死するのである。』(Ebenda. S. 191-192)

斯くて吾々は、經濟關係と法律關係とに就て述べた場合と同じく、政治形態が同一に留つて居る間に經濟關係はその內在的法則に從つて變化し、之に反して政治形態は、此の變化に適應して、派生的な、第二義的のものとしてのみ變化するが故に、經濟關係を政治關係から獨立に研究對象とするを得可く、唯、政治關係が(法律關係も同樣であるが)經濟關係の桎梏に化した場合、多少之に顧慮するに留るのである。

吾々は次に經濟關係と倫理關係との問題を取扱はう。既に引用した社會的、有機的、倫理學派の代表者シュトルツマンは、理論經濟學の對象中に倫理的關係をも引入れんとして居る。彼はシュタムラーと同じくカントの哲學を基礎として居る。

『カントの倫理學の核心であり、又實に中心でもあるのは人間、或は寧ろ人類、社會內の人間、社會的人間であり、單に自然的存在としての人間ではなく、寧ろカントの云ふ如く、より高き、より善き人間であり、單に現象としての、即ち其の本質が因果的に與へられた必然性の內にある現象人(homo phanomenon)としての人間に止まらず、更に同時に且つ究極に於て超感性的人間(homo noumenon)、即ち理性と自由の人間である。……さて然し、カントの云ふ如く、人間は『二つの世界の市民』、即ち自然發生的なもの、感性的に經驗し得るものゝ世界と、理性と自由の世界の市民である。從つてカントは次の如く區別して居る。一方に於て吾々は『凡ゆる吾々の思辯的要求を單に可能なる經驗の領域に限る』ことを知らねばならぬし、他方に於て『人間の所產としての自由』が存する、或は言葉を換へて云へば、吾々は吾々を動物の種屬から倫理的種屬に高めねばならぬ、吾々は、『殆んど無計畫に發展する文化』を計畫的に意識的に自己の掌中に獲へねばならぬ、即ち自由の王國內に於て創造者として獲へねばならぬ。凡ゆる倫理の源泉としての自由を以て、人間は第二の性質を創造する、そして自然と自由の結合、即ち正に偉大な形而上學的問題たる斯る結合の可能性を創造する。自然と經驗とが二つの『根原』、即ち感性と悟性との所產をなして居る如く、今や全認識のより大なる體系は更に二つに分れ、カントは夫等を認識の二つの室と呼んで居る、即ち自然と自由である。『立法的な形而上學を二つの室に分つことに依つて、純粹理性批判は經驗論の專制のみならず、無制限の名譽心の無政府的騷擾をも放棄した』蓋し後者の下に彼は思辯的理性の揑造の支配を考へて居る。彼は、理性的自由の人間は事實自然的存在條件の素材に從つては居るが、然し他方に於て彼の自由は熟練した料理人の自由――之はカントが好んで用ふる比譬である――以上のものを意味する。』(Stolzmann, Grundzüge einer Philosophie der Volkswirtschaft. 1925. S. 28) 『余は斯る思想を、その高所から、全く當然に、又眞に國民經濟の倫理的構成に移し得ると信ずる。』(Ebenda. S. 29) と。

彼はカントの二元論的世界觀に從つて、人間を自然的存在であると同時に、又理性的存在であると考へて居る。自然的存在としての個々の人間は動物と同じく必然的因果法則に從ふ。之に反して理性的存在としての人間は意識的に自己の理性に從つて、自由に目的を設定し得るものであつて、

目的論的法則に從ふ。ところで、人間は理性的存在としてのみ他の人間と結合して社會を構成し得る。何となれば、社會を構成するには各人が一定の强制に從ふことが必要であり、その强制は外的なものとしては法律强制であり、更に外的强制を保持する內的なものとしては倫理的强制であり、且つ斯る强制を創造し、又之に從ひ得るものは理性的存在としての人間のみであるからである。(Vgl. Ebenda. S. 78) 斯くて彼は、自然的存在であると同時に理性的存在たる人間の創造にかゝる國民經濟は一方に於て自然的範疇に屬すと共に、他方に於て社會的範疇に屬し、更に社會的範疇は外的法律强制とその基礎をなす內的倫理的强制とに分れる。

されば彼は次の如く云つて居る。『夫故國民經濟と雖も亦同樣な强制的構成である、と云ふのは、夫は法律規制をその構成要素として、夫自體の內に含むが故である。事實倫理的至上命令も、假令へ內的自律的であるが、夫が外的に實現される爲に客觀的法律原理を必要とする……。』(Ebenda. S. 78) 或は曰く『……「倫理」は實に一個の事實であり、夫は既に社會的存在の經驗的觀察に依つて直接與へられて居る。「實踐理性」は、事實吾人がその形而上學的起原をば考へ得るであらうが、その現はれに於て、その所產に於て一つの經驗的現象であり、斯る意味での實踐的なものは存在の一部である。斯る見地よりすれば、倫理は確かに理論經濟學中に屬する……。倫理的目的設定は歷史上發生した所の存在の一つの獨立的原因であり、夫には客觀的に作用する原因たるの意味が含まれて居る。確かに國民經濟的存在は、斯る原因として共に作用する所の要素(倫理)なしでは、歷史的にも又體系的にも常に說明されずに終ふ』と。(Stolzmann, Zweck in der Volkswirtschaft. S. 102)

斯くして、シュトルツマンは國民經濟を『倫理的目的構成』となし、從つて理論經濟學の對象中に倫理的關係をも引入れんとして居る。然し斯くすることに依つて、吾々が經濟關係、特に現代の資本主義的經濟關係を研究する場合、何等の役にも立ちはしない。既にブハリンの指摘して居る如く、(Vgl. N. Bucharin, Die politische Ökonomie des Rentners. S. 37) 『……は、市場に自然力的に作用する諸力(競爭、價格の變動、取引所等)を以つてして、「社會的生產物」が、その創造者を支配し、更に個人的(だが孤立して居ない)經濟主體の動機の結果が單に之等の動機に適應せざるのみならず、剩へ往々にして之等の動機に極端に對立すると云ふ假定に對して多くの例證を提供して居る。』例へば資本主義社會に內在する法則に從つて、必然的に現はれ來る恐慌現象の如き夫である。若し經濟關係がシュトルツマンの云ふ如く、『倫理的目的構成』であつた場合、何人と雖も理性的倫理的存在として恐慌を欲す可きではなく、又事實今日何人と雖も欲してはゐらぬにも拘らず、何故恐慌が起るかは全く說明し得ないであらう。此の一事を以つてしても、彼の如く社會を一つの「倫理的目的構成」と見る所の目的論的見解を完全に打ち破るに充分である。

吾々は以上に於て、經濟關係を法律、政治、倫理的關係から獨立に研究對象とするを得ることを證明して來た。更に他の社會關係に就ても同樣に、唯物史觀の見地より、經濟關係の對象としての獨立性を主張し得る。

三

吾々は前節に於て、暗默の內に前提して來た所の經濟關係の意味の說明に移らなければならぬ。

そして此の說明は同時に對象の第三の規定となる。

三、理論經濟學は生產關係を其の對象とする。

今日一般に承認されて居る解釋に從へば、『經濟』とは『人間の欲望充足に必要なる物質的（單に有體物を指すに止らず、更に廣く吾々の意識から獨立して存する所の客觀的實在を持す）手段の獲得に向けられた人間活動』を意味して居る。從つて『經濟關係』は斯る目的よりする人間活動の結果生ずる社會關係の意である。

ところで、斯る物質的手段を獲得するには、吾々は先づ最初に外的自然に働き掛けなければならぬ。即ち生產を行はなければならぬ。斯る一般に自然と勞働との交互作用として考へられた生產は、技術的形態、社會的形態の如何を問はず、總て人間の生存の爲に必要缺く可らざる前提である。斯る意味の『生產一般は一の抽象であるが、然し夫は共通なるものを現實的に浮き出させ、固定させ、從つて吾々に反覆を節約せしむる限りに於ては、一の合理的抽象である。』（Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. S. XV）

だが、吾々が自然と交互作用を營む場合、即ち『生產に際しては、人々は單に自然に働き掛るばかりでなく、又相互に働き掛る。彼等は專ら、一定の方法に於て協力し、彼等の行爲を相互に交換することに依つてのみ、生產を行ふ。生產を行はんが爲には、彼等は相互に一定の連結及び關係に入り込み、斯る社會的連結と關係の內に於てのみ、自然への働き掛けが行はれ、生產が存するのである。』（Marx, Lohnarbeit und Kapital. Elementarbücher der Kommunismus. Bd. 2. S. 25）と云ふのは、

若し人々が自然との闘爭の爲に、その力を協せないならば、生產は全然不可能であり、即ち個々の人間はこの闘爭を主張するには余りに微力であるが故である。されば、『吾々が歷史を遠く遡れば遡るほど、個人は、從つて又非獨立的なものとして生產する個人は、一のより大なる全體に屬して居るものとして現はれる、最初には尙ほ全く自然的な方法で、家族に、及び種族に迄擴大されたる家族に、後には、種族の對立と融合から生じたる種々なる形態の共同生活體に。』（Zur Kritik. S. XIV）『夫故吾々が生產に就て語る時には、夫は常に或る一定の社會的發展階段に於ける生產——社會的個人の生產に就て語るのである。』（Ebenda. S. XV）從つて『社會の外部に於る孤立せる個人の生產と云ふことは……共に生活し共に語る個人なくしての言語の發達と云ふに等しく、一の背理である。』（Ebenda. S. XIV）

斯くて、最抽象的な『生產一般』が歷史的現實として現はれる場合、夫は常に同時に、『社會的生產』であらねばならぬ。此處に於て吾々は、理論經濟學の對象の社會性を、ディールやシュトルツマンの如く、經濟外的事實、即ち法律、倫理に求める必要を何等感じない。寧ろ其の對象の社會性を夫自らの內から引出し得るのである。

吾は更に此の『社會的生產』は常に『再生產過程』として現はれることに注意しなければならぬ。『生產過程の社會的形態はどうあらうとも、生產過程は繼續的でなければならず、即ち、定期的に、常に新たに、其の同じ行程を通過しなければならない。一の社會は、消費することを止ることが出來ないやうに、亦生產することを止ることは出來ない。であるから、相關的に考察して見れば、凡て

の社會的生産過程は同時に再生産過程である。』(Kapital. Bd. I. Volksausgabe. 701.)

再生産の過程は、理論上、所謂『單純』であるか、或は所謂『擴大』であるか、或は遞增的生産であるか、孰れかである。孰れにしても、社會的生産が一定の程度に發達し、社會の生産と消費とが規則正しく反復される以上、凡ての社會の生産は再生産の行程として現はれる。

次に『社會的生産』が常に『再生産過程』であるならば、『社會的生産』は、同時に生産が交換、分配の行程を經て消費に至る行程を循環的に繰返す一聯の全體の活動を意味することになる。即ち、『再生産過程としての社會的生産』は所謂『本來の生産』(狹義の生産)に止まらず、更に交換、分配、消費をも包攝することになる。

斯くて、廣義に於ける生産は他の過程を包攝するに至る。然し更に狹義の本來の生産は或る場合には他の過程を夫自體の內に含み、又或る場合には他の過程を規定するのである。

先づ生産(廣狹兩義の)と交換(或は流通)との關係に就て云へば、

『第一に、明かに、生産夫自體の內に行はるゝ活動と能力との交換は、直接に生産に屬し、本質的に生産を構成する。第二に、同樣なことは、生産物の交換が、直接の消費を目的とする完成生産物の生産の爲の手段である限りに於ては、その生産物の交換にも當嵌る。然る限りに於ては、交換夫自體が生産に含まるゝ行爲である。第三に、實業家相互間の交換は、その組織が全く生産に依つて規定されるのみでなく、夫自體が生産的活動である。生産物が直接に消費の爲に交換される最後の階段に於ては、交換は全く生産の外に獨立に存在し、生産とは無關心なものゝやうに思はれる。然し、一、分業――夫が自生的なものであつても、夫自體既に歷史的結果であつても――がければ交換はない、二、私的交換は私的生産を前提とする、三、交換の集約度、交換の廣がり、竝に交換の方法は、生産の發展及び組織に依つて定まる、例へば、都市と田舍との交換、田舍に於る交換、都市に於ける交換、等。斯くして交換は、その總ての契機に於て、直接に生産に含まるゝか、然らずば生産に依つて規定される、と云ふことが解る。』(Zur Kritik. S. XXXIII.-XXXIV、河上、宮川共譯、四〇―四一)

次に(廣狹兩義の)生産と分配との關係に就て云へば、

『分配關係及び分配樣式は、たゞ生産要因の反面としてのみ現れる。賃勞働の形態に於て生産に關與する個人は、勞賃の形態に於て生産の結果たる生産物の分配に與かる。分配の組織は完全に生産の組織によつて規定される。分配は夫自體が生産の生産物である、夫はたゞにその對象の點から見て生産の結果のみが分配され得る、と云ふだけではなく、更に形態の點から見て、生産に關與する一定の樣式は、分配の特殊な形態を、即ち分配に關與する形態を、規定すると云ふ意味に於て。』(Zur Kritik. S. XXVIII-XXIX 河上、宮川譯、三一頁―三二頁)

然し、人あつて、斯く反對するかも知れない。『全社會を考察する場合にも、分配は、やはり或る方面では、生産に先立ち、生産を規定するやうに見える、謂はゞ先經濟的事實のやうに見える。征服民族は土地を征服者の間に分配し、かくて土地所有權の一定の分配と形態とを輸入し、從つて生

産を規定する、或は征服民族は被征服者を奴隷となし、かくて奴隷勞働を生産の基礎たらしめる。或は、國民は革命によつて、大土地所有權を破壞して小土地所有權たらしめ、かくてこの新たなる分配により、生産に新たなる特質を與へることがある。或は、立法が、大家族における土地所有權を永久化したり、または勞働を世襲的特權として分配し、それを階級的に固定せしむることもある。これら總ての場合においては、――しかも此等は總て歴史的に起つたことである――が分配が生産によつてゞはなく、寧ろその反對に、生産が分配によつて編制され、規定されるやうに思はれる。』(Ebenda. S. XXIX-XXX、河上、宮川譯、三三―三四頁)と。

然し乍ら、斯る『生産手段の分配』並に『更にこの同一の關係の別の規定たる、種々なる種類の生産への社會成員の分配』とは夫自體生産の内に含まる可きである。何となれば、斯る『生産に含まるゝこの分配を無視して、生産を考察することは明かに空虛な抽象である』からである。(Ebenda. S. XXX、譯、三四頁）假りに一歩を讓つて、『生産手段の分配』を生産の内に含ませずに、對立させるとしても、猶ほ歴史上生産は獨立變數として、生産手段の分配は從屬變數として現はれる。なるほど生産手段の分配は『一番最初には、自然發生的なものとして現れ得る。けれども、生産の過程それ自體によつて、それらは自然發生的なものから歴史的なものに轉化する、そしてそれらは或る一時代に對して生産の自然的前提として現れるとしても、他の時代に對しては生産の歴史的結果となつてゐる。それらは生産それ自體の内部において絶えず變更される。』(Ebenda. S. XXXI. 譯、三五―三六頁）即ち最も原始時代に於ては、初め生産に先立つて生産手段の分配が行はれ、後者が前者を規定したかも知れぬが、歴史的過程に於ては、一定の生産手段の分配と之に應じた社會成員の分配とを持つた生産形態の内部(例へば封建社會の内部)に於て、先づ機械が應用され、生産方法が變じて來れば、之に應じて新たなる生産手段と生産物の分配(例へば、手工的獨立の商品生産者から資本家への生産手段の所有權の集中、以前の余剰價値の收得者たりし小商品生産者が、賃銀勞働者に變ずることに依つて、余剰價値の被搾取者への轉化)を變更する。

次に(廣狹兩義の)生産と消費との關係に就て云へば、第一に直接の統一性として現はれる。『生産することに於てその諸能力を發展せしむる個人は、また生産行爲においてその能力を支出し消耗する……。第二に、生産することは生産手段の消費である……。同樣にそれはまた原料の消費である……。だから生産行爲それ自體は、その總ての契機において、また消費行爲である。しかしこのことは經濟學者の認めてゐるところである。消費と直接に同一な生産を、即ち生産と直接に一致する消費を、彼等は生産的消費と呼んでゐる。……しかし生産的消費といふこの規定は、全くたゞ、生産と同一な消費を本來の消費と分離せんが爲めにのみ、定立せられる。そこで我々は次に本來の消費を考察することゝする。

消費は直接にまた生産である。……消費の一形態、例へば食物の攝取において、人間が彼れ自身の身體を生産することは、明白である、しかし、このことは、總ての他の種類の消費についても、當てはまる、それらは皆何等かの樣式において人間を或る方面に生産するものである。「これは即ち」消費的生産「である」。もちろん、經濟學者の云ふ如く、消費と同一な此の生産は、第一の生産の

生産物の破壞から發生する第二の生産である。第一の生産においては、生産者が物に化せられ、第二の生産においては、物が人に化せられる。だから、この消費的生産は、……本來の生産とは本質的に異なるものである。』(Ebenda. S. XXII-XXIII. 譯、一八—二〇頁)

第二に媒介的統一性として現はれる。

『兩者の各〻は他のもの〻手段として現れ、他のものに依つて媒介されるのであるが、このことは、これを兩者の交互的依存性として表現することが出來る、即ちそれは、これら相互を關係せしめ、互に缺くべからざるものとして現れしめ、而もなほ相互を依然として別々のものたらしめてゐるところの、一運動として表現することが出來る。

生産は消費のために材料を外的對象として創造する、消費は生産のために欲望を、內的對象として、目的として、創造する。生産がなければ消費はない、消費がなければ生産はない。』(Ebenda. S. XXV. 譯二五—二六頁)

第三に創造としての統一性として現はれる。

『兩者の各〻は、自ら完成することにより、他のものを創造し、自身を他のものとして創造する。消費が生産行爲を完成するのは、それが生産物を生産物として完成せしむることに依つてゞあり、生産物を解消して、その獨立の物的形態を消盡することに依つてゞあり、最初の生産行爲に於て發展せし生産上の素質をば、反覆の欲望により、熟練にまで高めることに依つてゞある、だから、消費は生産物を生産物たらしめる終局的行爲たるのみならず、生産者を生産者たらしめる（終局的行爲）でもある。他方に於て、生産は、消費の一定の方法を創造することに依り、次には消費の刺戟、消費能力それ自體を欲望として創造することに依り、消費を生産する。』(Ebenda. S. XXVI. 譯二六—二七頁)

斯くして、吾々は次の如き結論に達した。第一に經濟關係は『人間の欲望充足に必要なる物質的手段の獲得に向けられた人間活動から生ずるもの』であり、更に夫は『生産』を現實の出發點とす可く、『生産』は常に『社會的生産』であり、『社會的生産』は常に『再生産過程』として現はれ、『再生産過程としての社會的生産』は『廣義に於ける生産』として他の交換、分配、消費の過程を包攝し、更に『狹義に於ける本來の生産』も一部他の過程を其の內に含むと共に、他の過程を規定するものである以上、吾々は『經濟關係』をば廣義に於ける『生産關係』を規定するを得る。從つて理論經濟學の對象は、斯る意味に於ける『生産關係』であると云ふことになる。

四

吾々は更に進んで、理論經濟學の對象をより正確に規定しなければならぬ。前節に於て吾々は、理論經濟學が社會的『生産關係』を取扱ふものであることを規定した。然し乍ら、『生産關係』としての社會關係を如何なる範圍に於て研究するかは疑問のまゝに止まつて居つた。此の『生産關係』の範圍の規定が、理論經濟學の對象の第四の規定として現はれる。

四、理論經濟學は生産共同生活體を其の對象とする。

吾々は此の規定を明かならしめる爲に、マクイバア(R. M. Maciver)の設定した Community（共

同生活體）と Association（結社）の概念を援用しやうと思ふ。

彼に從へば、廣義の Society（社會）は『凡ゆる人間對人間の意志關係を含む』（Maciver, Community. p. 22）との意味に用ひられて居る。此の廣義の社會を、更に特殊な社會的事實としての Community と Association とに分けて居る。

然らば Community とは何かと云ふに、『Community に依つて、私は共同生活の各地域（any area of common life）、例へば村落、都市、州、國或は更に廣い地域をも意味する。Community と云ふ名稱を附すには、其の地域が何等かの方法に於て、他の地域と區別されなければならぬのであつて、此の共同生活は、其の地域の境が或る意味を持つと云ふ程度に於て、夫自身の或る特徴を持ち得るであらう。物理的、生物的、及び心理的の凡ゆる宇宙の諸法則は合して、共同生活を營む人々を類似するに至らしめる。人間が共同生活をなす場合、常に彼等は進んで或る種の、或る程度相違した共同の諸特徴、——風俗、習慣、言語樣式等——を作り出す。是等は或る眞實の共同生活の印であり、結果である。一つの Community は更に廣い或る Community の一部たり得るし、凡ゆる Community は程度の問題であることは後に覺るであらう。……夫は共同生活の程度と强度の問題である。一方の極端は、人間の全世界であり、一つの大きな、然し漠然たる、ばら〳〵の共同生活である。他の極端は、小さな强い Community であつて、普通個人の生活は其の內部に於て營なまれ、夫は或る場合には大きな、或る場合には小さな、そして常に種々な境を持つた共同生活の小さな細胞である。……斯くて生ずる社會關係の無限の連鎖の內から吾々は、より强度の共同生活の細胞、例へば都市、國民及び種族を區別するのであつて、夫等をば就中 Community として考へる』と。（Maciver, op. cit., p. 22-23）

吾々は此の Community の概念を、夫と對立する Association の概念と對比することに依つて、益々明瞭ならしむるを得る。

『Association（結社）は或る共通の目的乃至幾つかの目的を遂行する爲の社會人の組織或は組織された團結（an organisation of social beings or a body of social beings as organised for the parsuit of some common interest or interests）である。夫は共通の目的に基いて建設された一定の社會團結である。人々が追求する凡ゆる目的は、夫に關係ある各人が團結して夫を追求し、即ち各人が夫を追求するに當つて協力をなす場合に、遙か容易に總ての者に達せられる。斯くて、諸君は社會人の有りと凡ゆる目的に應じて Association を持ち得るであらう。Community は永續的及び一時的 Association を泡立せるのであつて、現在の事實上の社會生活を研究する者は何人と雖も、各種の、例へば政治上、經濟上、宗教上、教育上、科學上、藝術上、文學上、慈善上、職業上の Association の數の頗る夥しさに驚かされざるを得ないのであつて、夫等は今日に於て從來よりも遙かに共同生活を豐富ならしめて居る。

Community は社會生活の焦點であり、社會人の共同生活であるが、Association は一つ、或は幾つかの共通の目的を遂行するが爲に明確に建設された社會生活の一組織である。Association は部分的であり、Community は全體的である。……一つの Community の內部に、單に多くの Association が存し得るばかりでなく、更に敵對的 Association も存し得る。吾々は些細の目的の爲にも、重大

な目的の爲にも結社を結び得るが、……然し Community は假令へ最大の Association よりも、廣い又自由な或るものであり、夫は大きな共同生活であり、夫から Association が生じ、其の內に Association は秩序付けられるが、Association は決して完全に夫を滿しはしない。よく考へて見るならば、吾々は直ちに次のことを認める。即ち一方に於て村落、都市或は國を構成して居る所の人間の共同生活と他方に於て、敎會、勞働組合、――乃至は國家をも――形成して居る所の人間の Association との間には非常な相違のあることを認める。屢〻國家の地域は事實上の Community の地域と一致しないことさへある……。名稱の區別は本質的なものである』(op. cit. p. 23-24) と。

以上に於て明かなる如く、マクイバアに取つては、Community は共同生活體であり、全體的のものであるに反し、Association は一定の目的を遂行する爲に作られた結社であり、部分的のものであり、前者が後者を泡立たせるのである。彼は又此の共同生活體に地緣的要素をも含まして居るが、之は吾々に取つては第二義的なものに過ぎない。

さて、此の『共同生活體』と『結社』の概念を理論經濟學に適用し、理論經濟學は個々の《廣義》の生產的結社を研究するものではなく、生產共同生活體 (The Community of Production. Produktionsgemeinschaft) を研究するものであると規定する。即ち理論經濟學は一つの結社たる個々の會社、工場、農場、國家經濟等を對象とするのではなく、――之等は經營學、工藝學、農藝學、財政學、私經濟學の對象である――之等の結社を泡立たせ、包括する所の全體的な生產共同生活體でなければならぬ。

斯る意味に於ける生產共同生活體の概念は、マルクスが唯物史觀の公式中に『人々は、その生活の社會的生產において、特定の、必然的の、彼等の意志より獨立せる諸關係を結び、……是等の生產關係の總和が社會の經濟的構造をなす』(Zur Kritik. S. LV.) と云つた場合の、『生產關係の總和』乃至『社會の經濟的構造』の概念に當ると思ふ。即ち個人が夫々意識的に個々の生產的結社（會社、工場等）を作る場合に、夫等から獨立に、寧ろ夫等の基礎として夫等を泡立せ、且つ夫等を包攝する所の全生產關係、全生產機構としての生產共同生活體が問題となるのである。夫等の生產共同生活體は、古代に於ては氏族、種族等の血緣團體として、中世に於ては莊園經濟、都市經濟等の地緣團體として、近世に於ては國民經濟、世界經濟等の政治的或は純經濟的紐帶に於て現はれたのである。

夫故に又吾々は、經濟の發展階段を區別するに當つても、歷史上の各生產共同生活體の機構の特徵に依り、特にその機構を明瞭に表はす所の生產手段の分配關係に依つて區別せんとするのである。過去に於ける經濟發展階段說は、斯る基本的關係を標準とすることなく、此の關係から生じた第二義的契機に依つて區別して居る。例へばリスト (Friedrich List, Das nationale System der politischen Ökonomie. 1841) は主要なる生活資料に從つて、第一期漁獵時代、第二期牧畜時代、第三期農業時代、第四期農工業時代、第五期農工商時代に分ち、又ビヒヤー (Karl Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. 1908) は地域上の見地から、封鎖的家內經濟、都市經濟、國民經濟に分ち、ヒルデブラント (Bruno Hildebrand, Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft. 1848) は交換形態に從つて、自然經濟、貨幣經濟、信用經濟に分けて居る。然し乍ら、吾々は斯る第二義的の契機を

造り出す所の各生產共同生活體の機構、特に其の機構の顯著な現はれとしての生產手段の分配關係に依り、マルクスと共に、『大體に於て、アジア的、古代的、封建的、及び近代的資本家的生產方法は、經濟社會形態變更の累進的時代として示すことが出來る』（Zur Kritik. LVI）と思ふ。即ち土地の共有を基礎とする村落共產體たるアジア的生產共同生活體、奴隸所有を基礎とする古代的生產共同生活體、領主の土地所有を基礎とする封建的生產共同生活體、資本家に依る生產手段の獨占を基礎とする近代の資本家的生產共同生活體とを區別し得ると思ふ。

以上に於て、吾々は理論經濟學の對象は、常に個々の生產的結社ではなく、之を泡立たせ、包括する所の、其本的な生產共同生活體であると云ふ結論に達した。

五

吾々は前節に於て、理論經濟學の對象は生產共同生活體であると云ふ規定をなしたが、更に起つて來る疑問は、それでは從來歷史上に現はれた凡ゆる生產共同生活體を夫々研究するのか、夫とも特定の生產共同生活體のみを研究するのかと云ふ疑問である。（勿論此の場合、凡ゆる生產共同生活體に共通の法則を研究するに非ずやとの疑問は無意義である。と云ふのは、夫々可變的なる社會形態から、不變的な共通の要素を引出すことは、單に自明な、無內容な自然的條件を明かにするに過ないからである。）此の問題に對して、吾々は次の如き規定を立る。

五、理論經濟學は資本主義的生產共同生活體をその研究對象とする。

斯る理論經濟學の對象を凡ゆる生產共同生活體に擴大す可きや、夫とも特定の（資本主義的）生產共同生活體に限定す可きや否やの問題は、從來、否な殊に最近ロシアに於てマルクス主義經濟學者の間に論爭の中心點となつて居る。（河野重弘譯「經濟學とは何ぞや」ソヴエート・ロシア經濟學叢書第二卷參照）

擴大派に屬する者としては、ボグダーノフ、ステパーノフ等がある。ボクダーノフは其の著『經濟科學概論』（邦譯、林房雄、木村恭一、改造文庫）の冒頭に於て、『經濟學の取扱ふ對象は人と人との間の社會的勞働關係の領域である』（同書二三頁）と規定し、進んで凡ゆる社會的勞働關係の領域（吾々の所謂生產共同生活體）を研究して居る。又、ステパーノフは一九二五年一月三十一日の共產アカデミーに於ける報告『經濟學とは何ぞや』に於て、理論經濟學の對象を資本主義的生產共同生活體以外に擴大す可きことを主張して居る。

ステパーノフの論據とする所は次の點にある。彼は實踐的唯物論者の立場から、理論經濟學は實踐に役立つものでなければならない、而して實踐は現實を基礎としてのみ行はるゝが故に、又理論經濟學は現實の社會を把握しなければならぬと。然るに現實には純資本主義的社會なるものは存せずして、常に其の內には封建的、乃至は古代社會的殘滓が存するのである。夫故に、理論經濟學の對象を資本主義社會に限る可きではないと云ふ點にある。

彼は右の報告に於て、先づ理論經濟學の任務を規定して居る。『我が經濟學はそれが事物を把握するまゝに事物を研究する、それと共にそれは、現代の經濟を止揚するところの實在的運動の諸前提——現在現實にあるところの——を曝露する。』（邦譯、三頁）『即ち積極的科學としての經濟學の對

象は、「それが把握するところの」實在的經濟的諸關係、即ち現實に存在するところの經濟、現代の經濟であると。』然るに『實在的資本主義の理論は、封建時代に對しても巨大な切開をしなければならぬ、何故ならば封建時代の巨大な切開は今日に到るまで現代資本主義に保存されてゐるから、今日に到るまで私的土地所有が保存されて居つて、それは資本が創造したものではなく、資本がその歴史的前提として見出したものであるから』(同書二三頁)と。

更に進んで彼はエンゲルス、マルクス、レーニンを引用して後、結論して曰く、正に理論經濟學は現實の資本主義を對象とする以上、又他の古代、封建社會をも研究對象中に含む可きであると。

然し乍ら、斯る主張は第一に理論經濟學を經濟史と、第二に理論經濟學を經濟政策と混同する誤謬に墜る。既にオシンスキーが適切に指摘して居るが如く、『ステパーノフはマルクス主義經濟學の歴史學派の基礎をつくるものである。』(邦譯「經濟學とは何ぞや」一五二頁)と云ふのは、丁度歴史學派が理論經濟學の對象を凡ゆる發展階段に於ける經濟に迄擴大し、其の結果法則を定立する理論的研究を否定し、單に過去に於ける經濟史的事實の記述に終つたのと、同一の運命に墜入るからである。假りに一歩を讓つて、凡ゆ生産共同生活體の經濟史的事實の記述ではなく、夫々の生産共同生活體内の特殊な法則を定立したならばよいではないかと云ふかも知れぬが、資本主義的生産共同生活體以外の生産共同生活體内に於ては、法則を定立せんが爲に理論的研究をなす何等の必要も存さないのである。此の點は後に至つて明かとなる。第二の誤謬は理論經濟學と經濟政策との混同である。

なるほどマルクス主義經濟學は實踐に對して理論的基礎を與るものでなければならぬ。それだからと云つて、理論經濟學即ち經濟政策ではない。理論經濟學は經濟現象の一般的法則を定立するものであり、斯くて定立された一般的法則を基礎として、更に夫々の場合の具體的特殊條件を斟酌しつゝ政策を打立てるのである。若しも極端に、理論經濟學は直ちに實踐に役立たねばならぬとすれば、夫々の具體的事情を研究しなければならず、從つて、夫々具體的事情を異にする各國に夫々特殊な理論經濟學が存さなければならぬし、斯る理論經濟學は理論的研究よりも、遙かに多くの具體的事情の記述が含まれて來るであらう。此の點に於て、ステンの批評は一考するに價する。

『同志ステパーノフは、實踐的唯物論者たる我々共産主義者は、行動するために、あるがまゝの事物を知らねばならぬといふ正しい命題から出發した。だが我々が行動し始めて世界の變革を起すとき、我々がその變革に從ふところの個々の事物にのみ我々の注意を集中したら、一般的な合則性を見逃す危險に落ち入る。我々が事物を變革するときは、それと余りに接近するため、その一般的な連繫と、それと他の事物との媒介性を見ることが困難になつてゐる。同志ステパーノフの修正はまさにかゝる氣分とかゝる狀態…を反映してゐるのである。正しく行動するためには、個々の事物についての表象をもつだけでは不充分であつて、發展の諸法則を知らねばならぬ。我々が資本的社會と資本制生産樣式とを考慮する場合、資本制社會に保存されてゐる他のすべての社會的經濟的基礎の分析を平等な理論的權利の上に行ふことを論じてはならぬ。資本主義の支配下においては、家長制經濟、封建制度等々の從前の社會的經濟的構造の殘存物の發展法則は、根本的な、支配的な、

資本主義的發展の合則性に從屬してゐる。だからして、我々が自身の實踐的現實において從前の經濟的構造の殘存物を算量しなければならぬときは、これらの殘存物の眞實の役割を、たゞこれらの殘存物を從屬せしめてゐるところの資本主義の一般的諸法則の知識を基礎としてのみ明かにしうるのである』と。（同書一九四―一九六）

斯くて理論經濟學の對象を凡ゆる生產共同生活體に迄擴大することを否定するならば、次に如何なる生產共同生活體に限る可きやの問題が生ずる。此の問題に對する解答は、資本主義的生產共同生活體のみであると云ふことに歸着する。と云ふのは、斯る生產共同生活體に於てのみ、理論的研究の意義が存するからである。然らば、何故に斯る生產共同生活體のみに理論的研究の意義が存するのか。此の問題に對する解答こそ、理論經濟學の對象の最後の規定を證明するものである。

さて科學は一般に事物の本質を研究するものである。夫故『若し事物の現象形態と本質とが直接相一致するとすれば、一切の科學は不用に歸するであらう。』（Marx. Das Kapital. herausgegeben von Engels. Bd. III. 2. S. 352）此の事柄を明らかならしめんが爲に、河上博士の屢〻用ひられる例を借用しやう。『例へば太陽が地球の周りを廻つてゐるのではなく、地球が自轉しながら太陽の周りを廻つてゐるのであるが、しかし吾々の眼には、逆に太陽が地球の周りを廻つてゐるかの如く見える。吾々の肉眼にうつるかぎりにおいては、太陽は日々、あしたには東の空に上ぼり、ゆふべには西の空に沈むのである。だから誰でもが、一應は、吾々の住んでゐる地球自體が動くのだと考へない。かくて現象形態（眼に映つたまゝの形）に捉へられてゐる者の意識は、事物の本質（事の眞相）を顚倒することとなるのである。』（河上肇、「マルクス主義經濟學」改造文庫、一七―一八頁、「資本論入門」三頁以下）斯る現象形態と本質との間に相違の存する場合にのみ、科學を必要とするのであつて、若し直接兩者が一致する場合、わざ〳〵科學的研究（例へば、天文學的研究）をなすの必要は少しも存さないのである。

次に、斯る本質の研究を對象とする科學には、ブハリンの指摘して居る如く、二つの形態がある。『科學一般は總て二つの目的を追求し得るのであつて、夫は一定の時、一定の場所に於て、事實何が存したかを記述するか、それとも、夫は定式を以つて表はされる現象の法則を導出さんとする、即ち、A、B、C、が存する場合、又Dも現はれなければならぬことを研究する。第一の場合に於ては、科學は個體記述的（idiographische）性質を表はし、第二の場合には、――法則定立的（nomographische）性質を表はす。』（Bucharin, Die politische Ökonomie des Rentners. S. 17）廣義に於ける經濟學中、經濟史は前者に屬し、理論經濟學は後者に屬することは、今日何等の疑も存さない。勿論過去に於ては、歷史派經濟學は、一般的法則の導出を輕んじ、結局一般に、科學としての理論經濟學を破壞し、夫を個體記述的性質を有する純粹記述と置き代へ、即ち理論經濟學をば經濟史と經濟統計とに――この特に個體記述的な科學に、――解消させては居るが。

斯くて、科學としての理論經濟學は、第一に、現象形態と本質との間に相違の存する場合に、第二に、夫等本質相互間に一定の法則を定立する必要のある場合に、存在の意義がある。

然らば、斯る意味に於て理論經濟學は、凡ゆる生產共同生活體に存在の意義があるか。吾々は此

の問題を解決するに先立つて、從來の凡ゆる生產共同生活體を二つの主要形態に分けよう。一つは組織的生產共同生活體であり、他は非組織的生產共同生活體（所謂、交換經濟、商品經濟、無政府經濟）である。

組織的生產共同生活體に於ては、凡ゆる社會的生產が人間の意識的意志に依つて管理され、一定の計畫に於て營まれる。意識的意志の中央機關が生產の個々の部門を、夫等相互間にも、亦社會的欲望に對しても、均衡を保たしめる。そして、中央機關は、生產物の分配を組織的に指導するのである。古代に於ける組織的生產共同生活體に於ては、別に發達した統計的設備も、精密な科學的計算も行はれなかつたが、兎に角生產管理の原則はあつたのである。即ち直接の經驗に從つて、長老、奴隸所有者、領主等が、その精密さに於ては今日のソビエット社會主義社會に非常に劣つて居るとは云へ、とにかく生產管理を行つて居つたのである。

之に反して、非組織的生產共同生活體――その內には、その未發達の形態に於ては單純商品生產社會、その最も複雜な、最も發達した形態に於ては資本主義社會が屬するが――の內には、社會的生產の何等の計畫も、亦社會的欲望を充足せんが爲には、如何なる生產物が、如何なる分量に於て生產されなければならぬかを決定すべき何等の機關も、全然存さない。この社會では、生產は何等の組織的紐帶に依つても連結されず、形式的には相互に依存せざる數千萬の獨立企業家に依つて行はれる。各企業家の各〻が生產を營むのは、自己のために、即ち自己の消費のためにではなく、專ら賣らんが爲に、即ち商品を生產せんがためである。

然し、社會的欲望の大さを知つて居る企業家は一人も存さない。各企業家は臆測で以つて自己の生產の大さを決定する。彼は賣る望みのあるだけの物を生產する。從つて彼は、常に或は商品を多く生產しすぎるか、或は少く生產しすぎるかする危險を冒す。生產物の分配も亦、同樣に無政府的自然力的に行はれる。無組織的生產共同生活體に於て、生產物がその個々の成員間に分配されるには、決して彼等成員の必要に從つて、又は社會的生產に對する彼等の參加の割合に應じて行はるゝものではない。生產物を得るものは、特に强く夫を必要として居る者ではなくして、夫に對して高き價格を支拂ひ得る者である。

右に於て、組織的生產共同生活體と、非組織的生產共同生活體との一般的特質が明かになつたと思ふ。斯る特質よりして、吾々は先づ第一に、組織的生產共同生活體に於ては、生產關係の現象形態と本質とが相一致し、又夫等生產關係は意識的に一定の規定に從つて律されて居るからして、夫等の關係間に別に法則發見の必要もなく、夫故にこそ、何等理論經濟學の存在の意義がないと云ふ結論に達し得る。

此の事を明かにする爲に、ローザ・ルクセンブルグに從つて、次の二つの例を擧げやう。

『まづ吾々は今日の世界經濟がまだ成立せず、商品交換は漸やく都市に榮えてゐるだけで、田舍には自然經濟（註、自給自足の經濟）が、即ち自家の需要のための生產が、大莊園にも小農民地にも支配してゐる時代に身を置くとしよう。例へば前世紀の五〇年代にデューガルト・スチュアート（Dugald Stewart）の記してゐる高スコットランドに於ける事情を例に取らう。（Zitiert bei Marx, Das Kapital. Bd. I. S. 451）「統計によれば高スコットランドの若干部分に於ては、多くの牧夫及び小屋

棲み農人は、その妻子と共に、自分で鞣した革で自ら造つた靴を穿ち、材料を自分で羊から剪つたり、自分で栽培した亞麻で作つたりして、自分以外には誰れの手にもかゝらない衣服を着てゐた。衣服の仕立て上げには大針、縫針、指抜、及び機織りに使用される鐵製品の極少部分を除いては、殆んどこれといふ品は購はれなかつた。染料は婦人自身の手で、蕎木、瀧木及び草類から採取されてゐた。』(Rosa Luxemburg, Einführung in die Nationalökonomie. herausgegeben von Paul Levi. 1925. S. 45. 佐野文夫譯、七六―七七頁)

『今日でもこういふ農家はボスニヤ及びヘルツェゴビナ、セルビア、ダルマチアに存在してゐる。そこで高地スコットランドやロシア、ボスニヤやセルビアのこういふ自家經濟を行つてゐる農民に對して、『經濟目的』、『富の發生と分配』といふような、國民經濟學の大學教授式常套質問を提起しようとするならば、この農民は吃驚仰天するに相違ない。何のために、何の目的で俺と俺の家族とが働くか、それを學者らしく云ひ現すなら、如何なる『動機』が俺を『經濟』に向はせるかといふのか？　農民は叫ぶであらう。吾々は兎に角生きなければならないのだ、そして炙つた鳩が吾々の口の中に飛び込むものではない。働かなければ餓死するだらう。だから吾々はどうにか暮してゆくために、腹一杯食べて、サッパリしたものを着て、家らしいものに住むために働くのだ。何を吾々が生産するか、『如何なる方向』を吾々の勞働に與へるかといふのか？　これもまた分り切つた質問だ。吾々が使ふもの、それぞれ百姓の一家が生活に必要なものを生産するのだ。…勞働をどういふ具合に『分割』してゐるかといふのか？　これもまた不思議な質問だ！　云ふまでもなく男は男の力が入用な仕事をやつてゐるし、女は家のことや、牛のことや、鷄小屋の世話をし、子供はあれやこれやを手傳ひをするのだ。…更に續けて云ふ、どんなものを俺の富と呼ぶかといふのか？　こんなことは村のどんな子供だつて知つてゐる！　充分な穀物小屋や、設備の整つた牛小屋や、澤山な羊の群や、大きな鷄小屋を持つてゐる百姓は富んでゐるのだ。』(Ebenda. S. 46-47、同書、七八―七九頁)

『吾々は玆に農民をして經濟學の博學なる質問に長々と答へさせたが、それにも拘らず學問的研究のために手帳と萬年筆とを携へて、高スコットランドやボスニヤの農家にやつてきた大學教授は、その質問の半分も濟まないうちに、早くも再び門外に踵を回へすに相違ないと確信する。事實に於てこういふ性質の農民經濟のすべての事情は、言ふまでもなく簡單明瞭なものであつて、經濟學的解剖刀を以てこれを解剖することは無駄な遊戯のように思はれる。』(Ebenda. S. 47、同書、八〇頁)

『更に別な一例を擧げよう。即ち世の中から忘れられた個々に何處でもつゝましやかな生活を營んでゐる小農家を去つて、一大帝國の最高頂に視線を向けよう。即ちカロロ大帝の經濟を觀察することにしよう。…彼れは、その料地及び莊園に於る經濟事情に對しては極めて細心であつた。彼れは莊園の經濟原則に關し七十條項より成る特別の法典を自から編纂した。これが有名な Capitulare de villis 即ち莊園法典であつた。』(Ebenda. S. 48 同書八〇―八一頁)

『さて法典を仔細に調べて見よう。大帝は何よりもまづ人々が彼れに實直に仕へることを要求し、耕地に於る家臣が充分な心づかひを受け、貧困に陷らぬように保護される道を講じてゐる。彼れ等に力以上の仕事を課してはならぬ、夜に入つても働かされる場合には相當の賠償を與へられることになつてゐる。家臣の方では誠實に葡萄栽培に氣を配り、何等過失なしに搾つた葡萄汁を壜に詰めなければならぬ。…更に大帝は次ぎの如く規定してゐる。料地においては蜜蜂と鷲鳥とを飼養し、家禽はよく飼養して殖やさなければならぬ。牝牛、種牝馬、羊等家畜の增殖に最大の配慮を與へなければならぬ。

…大帝は更らに規定して曰く、莊園の收益は精密に計算して報告しなければならぬ、しかも各個の事物に亙つてそれぞれ幾許產出されたかを報告しなければならぬ。…又料地にも各技藝を專攻した各種の手藝者の充分な數が存在してゐなければならぬ。…更に大帝は降誕祭を以て彼れが毎年富の總勘定を徵收する期日と定めて居る。…最後に大帝は法典の最後の條文において、一料地に栽培されてゐる凡ゆる花卉草木…等を一々報告すべきものとして擧げてゐる。そしてこの有名な法典は種々の林檎の種類の列擧を以て終つてゐる。』(Ebenda. S. 48 50、同書、八三―八四頁)

『これが九世紀における皇室經濟の光景である。そして右は中世の最も有力にして最も富裕なる君主の一人を擧げたものであるが、この君主の經濟にしろ、この農場經營の原則にしろ、最初に觀察した矮小農家を卒然として聯想せしむるものがあ

ることは、何人も雖も同意するに相違ない。この場合もとの皇室の主に向つて、前述のような富の本質、生産の目的、分業等の國民經濟學の根本問題を課さうとするときには、このあるじは皇帝らしい手裁きを以て、山のやうな穀物、羊毛、大麻や、葡萄酒、油、酢の樽や、牛小屋や羊小屋を指さして見せるに相違ない。そして吾々は矢張りこの場合も、實際こういふ經濟においては、國民經濟科學は一體如何なるものについて秘密な「法則」を研究し、解明すべきであるかを知らないであらう。けだしこの場合一切の相互關係、即ち原因と結果、勞働とその成果は掌を指すように明白だからである。』（Ebenda. S. 50、同書、八四―八五頁）（更に是等に關する例としては、Marx, Das Kapital. Bd. I. S 43 44、を參照され度し）

以上の例に於て明かなる如く、一般に組織的生産共同生活體内にあつては、生産關係に於ける人間對人間の關係が直接表面に現はれて居り、即ち本質と現象形態とが一致して居り、且つ夫等人間對人間の關係は、例へば自足經濟を營む村落の、各小農家の戸主の意識的指圖に依り、或は莊園内に行はるゝ一般的慣習規定に依つて律せられ、夫等生産關係間に、特別に法則を發見するが爲の理論經濟學を必要としない。

然るに、一度組織的生産共同生活體から非組織的生産共同生活體――其の内には單純商品生産社會及び資本主義社會があり、後者は前者の諸契機を其の内に含んだ、最も發達せる、複雜な非組織的生産共同生活體であるが――に眼を轉ずるならば、事情は全く異つて來る。

第一に、此處に於て、は生産關係の本質と現象形態とが相違して現はれる。即ち其の本質に於て人間對人間の關係である生産關係、は物對物と云ふ現象形態を取つて現はれて來る。蓋し、非組織的生産共同生活體、即ち商品生産社會（特に資本主義社會）の特徴は、各個人を連結する關係が、此處では直接に現はれないといふ點にある。商品生産社會の生産諸關係は、專ら物の媒介を通じて實現され、表現されるに至るのである。例へば、形式的に獨立獨歩の二人の企業家間の聯關が、たゞ一方の手から他方の手に商品が移動することに依つてのみ達せられる。この運動なくしては、個々の企業家は相互に全然分離して存在する。此處では、商品は單なる物ではなくして、人々の間の經濟的連結の道具である。商品の媒介を經るに非ざれば、個々の個人經濟間の連結は實現しないし、又實現することを得ないのである。夫故に、此處では商品は啻に經濟的連結の道具たるのみならず、更に又此の連結の表現の唯一の形式である。

直接に現はれない生産諸關係は、此處では物の具有する特殊な性質の中に現はれる。即ち人間關係たる生産關係は物的外皮を帶びて現はれる。斯くて勞働の社會的性質は、一見商品の内在的性質の如く思はれる交換價値の形態の下に隱れてゐる。之ぞマルクスの所謂商品の魔術性である。之に關して、マルクスは次のやうに述べて居る。

『然らば勞働生産物が商品形態を採るや否や帶びる所の謎的性質は、何處から生ずるか。明かに商品形態それ自身から生ずるのである。（一）諸種の人間勞働が等一であるといふ事實は、勞働諸生産物の等一なる價値對象性といふ物的形態を受け、（二）人間勞働力の支出が時間的繼續を以つて秤量されるといふ事實は、勞働諸生産物の價値大小といふ形態を受け、而して最後に、（三）勞働の社會的性質を確立せしめる生産者間の關係は、勞働諸生産物間の社會的關係といふ形態を受ける。』（Das Kapital. Bd. I. S. 38. 高畠譯、新潮社版、第一卷五六頁、河上、宮川譯、岩波文庫、第一分册、一〇六頁）

『かくして商品形態を秘密に充ちたものとする原因は、要するに左の事實に存することとなるのである。即ち商品形態なるものは人間勞働の社會的性質をば、勞働生産物の對象的性質として、勞働生産物の社會的なる自然性質として見えしめ、かくして、また總勞働に對する生産者の社會的關係をば、生産者の外部に存在する各對象間の社會的關係として見えしめるこ

いふ事がそれである。かかる物對物に依り、勞働生産物は商品といふ有形的にして且つ超有形的なる物、換言すれば社會的の物となるのであつて、これ恰も物が視神經に與へる光りの印象が、視神經それ自身の主觀的刺戟としてではなく、寧ろ眼の外部に在る物の對象的形態として表現される如くである。たゞ、物を視る場合には、現實に於て外部的の對象たる一つの物から、目といふ一つの物に光が投ぜられるのであつて、物理的の二物間における物理的の一關係が成立するに過ぎないのであるが、商品形態竝にそれを表現してゐる所の、勞働諸生産物間の價値關係は是れに反して、勞働諸生産物の物理的性質及びそれに基く物的諸關係とは何等關係するところなきものである。商品の形態のもとに物と物との關係の幻想的形態を持つて人類の目に映ずるものは、人類自身の一定の社會的關係に外ならない。……私は之を、勞働生産物が商品として造られるや否やそれに固着し、隨つて又商品生産から不可分のものとなつてゐる所の竅術性と名づける』と。（Das Kapital, Bd. I. S. 38 39. 高畠譯、五七頁、河上、宮川譯、一〇六―一〇七頁）

斯くの如く、非組織的生産共同生活體内にあつては、單に生産關係の本質と現象形態とが相違するばかりでなく、更に夫が無政府的生産組織なるが故に、生産關係を規律する意識的規定が缺け、從つて、恰も自然法則の如き『見えざる手に導かれる』に至るのである。

例へば、恐慌の如き、其の最も顯著な例である。吾々の知つて居るやうに、恐慌は商品が過剰に生産され、販路を見出し得ず、その結果商業と、夫に伴つて産業とが停止することから起るのである。然るに、商品の製造、販賣等は眞く粹人間的關係である。商品を生産するのは人間自身である。それを買ふのも人間自身であり、商業は人間から人間へと行はれるのであつて、吾々は近代的恐慌を形成する事情の中に、人間の行爲以外に存する要素を一つだに見出すことは出來ない。夫故恐慌を惹き起すものは、人間社會自身を外にして他の何物でもない。何人と雖も恐慌を欲しては居らぬのにも拘らず、而も恐慌は『家屋が人の頭上に倒れかゝる時の重力の法則』（Das Kapital, Bd. I. S. 42）の如き盲目的必然性を以つて襲ひかゝつて來る。人間は夫を自分自身の手で作り上げながら、而も世の中にさう云ふものが無ければよいと思つて居る。此處に吾々は事實に於て、關係者の意識から直接説明し得ざる所の經濟生活の一つの謎を目擊する。

又日々不斷に起つて來る失業と云ふ現象を取つて考へて見やう。夫は何等物理的自然現象でも超人間的な力でもなく、經濟關係の純人間的産物なのである。然るに、夫を何人も企てず、何人も意識的に望みもしないのに、自然現象のように規則正しく起り、謂はゞ人間の頭から離れて生ずる所の現象を見る。此處に於ても又、一箇の謎に直面するのである。

更に商品の價格變動を例に取つて見よう。人間自身が商品を作り、その價格を決めるのであるからして、價格の變動は明かに純粹の人間的事柄であつて、決して魔法ではない。夫にも拘らず、誰も企てたり望んだりしなかつたものが現はれて來るだけである。そして其の價格の變動は時に正に致命的な結果を及ぼし得る。蓋し價格の低落は、彼等を强いて、その企業活動を廢せしめる。即ち彼等は、破産するのである。この現象は、正に取引所の賭博が夫に依つて行はるゝ有價證券市場に、より顯著に現はれる。

斯くの如く、非組織的生産共同生活體――其の内で、最も包攝的な、代表的なものは資本主義的生産共同生活體であるが――内に於てのみ、生産關係の本質と現象形態とが相違し、且つ夫等生産諸關係は謎の如き自然的必然的法則に支配され、夫故にこそ、唯、斯る生産共同生活體にのみ理論

經濟學的研究の存在の意義があるのである。

斯る非組織的生產共同生活體と理論經濟學との一致は、又歷史的事實が證明して居る。なるほど、經濟思想は遠く古代希臘に迄溯り得るであらう。然し學としての理論經濟學の成立は、正に以上の如き非組織的生產共同生活體の成立と時を同じくするものである。即ち十八世紀に於て、封建的な自給自足的自然經濟から、商品生產が支配的地位を占むるやうな單純商品生產及び資本主義社會へと推移するに及んで、其處にフジオクラート、古典派經濟學派が初めて經濟學を學として成立せしむるに至つたのである。

斯くして、理論經濟學の對象は、專ら資本主義的生產共同生活體――夫は同時に他の凡ゆる非組織的生產共同生活體の諸契機を其の內に包攝する――のみであると云ふ結論に到達する。ブハリンも其の著『轉形期の經濟學』の冒頭に於て、之と同じ意味のことを書いて居る。

『理論經濟學は、商品生產を基礎とする所の社會經濟に關する科學であり、即ち非組織的社會經濟に關する科學である。生產が無政府的であり、正に同樣に又生產物の分配が無政府的であるやうな社會に於てのみ、社會生活の合法則性は個人乃至共同生活體の意志から獨立せる『本原的自然法則』……の形態に於て現はれる。マルクスは初めて此の商品生產の特殊な獨自性を指摘し、其の商品の魔術性の理論に於て、理論經濟學への素晴らしい社會學的手引きを與へ、以つて彼は理論經濟學を歷史的に限定された學問として基礎付けたのである。事實、吾々が組織的社會經濟を觀察するや否や、價値、價格、利潤等の經濟學の凡ゆる根本問題は消へ失せて終ふ。此の場合、『人間對人間の關係は、『物對物の關係』に於て表はされることなく、又社會經濟は市場及び競爭の盲目的力に依つて支配されることなく、寧ろ意識的に遂行された計畫に依つて支配される。夫故此の場合には、一方に或る記述の體系が、他方に規範の體系が存し得る。だが此の場合には、市場の『盲目的法則』を研究する科學に對して、何等の余地も存さない、と云ふのは、市場其ものが缺けて居るからである。斯くして、資本主義的商品生產に基く社會の終焉は又經濟學の終焉をも意味するのである』と。(N. Bucharin, Ökonomik der Transformationsperiode. 1922. S. 1-2)

斯く、吾々は其の對象を歷史的に限定することに依つて、正統派とは異なり、歷史派に近附くとは云へ、他方に於て歷史派の如く法則の發見を否定せず、正統派と共に之を認むることに依つて、正に既に對象に於て兩者の缺陷を止揚するものである。

尙ほ吾々に殘されて居る最後の問題としては、現論經濟學の對象を資本主義的生產共同生活體を其の運動過程に於て獲へると云ふ規定であるが、此の問題は理論經濟學の方法、即ち唯物辯證法を研究する場合に、他日論じやう。